1950年代「療養俳句」における想像力の射程

——『土方鉄句集—よき日のために』論

Izumi GOTODA(後藤田和 : PhD student,

Hiroshima University Japanese Language and Culture Education)

✉ igotoda@outlook.jp

(日本)広島大学大学院教育学研究科博士課程後期。日本近現代文学、部落問題文学。主著に「サークル文化運動と部落民の表現：土方鉄を中心に」(広島：『論叢国語教育学』14, 2018)。

The Range of Imagination in Medical Haiku in the 1950s

: A Study of *The Collection of Tetsu Hijikata's Haiku : For a Good Day*

The purpose of this paper is to evaluate *The Collection of Tetsu Hijikata's Haiku : For a Good Day*, which depicts the treatment of tuberculosis in haiku of the 1950s. It is an important work which can help us to reconsider the contemporary framework of medical and social haiku. First, we will assess the representation of tuberculosis in modern Japanese literature and compare the medical haiku of the 1950s with Hijikata's haiku.

In the study of the representation of tuberculosis in modern Japanese literature, the haiku genre has rarely been addressed. In addition, research on medical haiku has tended to attract attention only to Hakyō Ishida's haiku.

For that reason, I will focus on the Tetsu Hijikata's haiku, which were influenced by Hakyō Ishida's work. Most of the medical haiku of that time express the fear, suffering, and sorrow associated with the treatment of tuberculosis, and the increasing stereotypicality of such work was reinforced by the social haiku which appeared in the haiku field at that time. In such a situation, Hijikata referenced the Asia-Pacific War and the Korean War by using the word "roar" in conjunction with the treatment of tuberculosis. On this basis, *The Collection of Tetsu Hijikata's Haiku : For a Good Day* can be evaluated as a text that captures the contemporary framework of medical and social haiku, and that develops a new framework for the genre.

Keywords Tetsu Hijikata(土方鉄), Hakyō Ishida(石田波郷), Medical Haiku(療養俳句), Roar(爆音), The Korean War(朝鮮戦争)

1 はじめに

日本近代文学における結核という病の表象について、いち早く言及したのは柄谷行人「病という意味」¹であった。柄谷はスーザン・ソントグ『隠喩としての病』²を援用しながら、「西欧では十八世紀中葉までに、結核はすでにロマンティックな連想を獲得し」「結核こそ上品で、繊細で、感受性の豊かなことの指標となっ」ていたこと指摘し、結核という病を「意味」として捉えた。そういったイメージが日本においては、徳富蘆花『不如帰』(1900)に描かれた浪子の「美しく病み衰えていく」描写から「文学によって神話化された」と論じている³。

また、こういった文学における結核表象に関して、福田真人は、「作品の中に描かれた結核患者像や結核という病そのもののイメージが増幅され再生産され」ることによって、「美的で特権的な結核のイメージ」、つまり「佳人薄命、夭折、天才といったプラスのイメージ」が構築されていったことを明らかにした⁴。この「イメージ」は、『不如帰』などの明治期の文学においてだけではなく、堀辰雄『風立ちぬ』(1938)に描かれた「サナトリウム文学」へと引き継がれていく。

こういった先行論に対し、近年では、結核が治る病になってからの問題が論じられるようになってきた。例えば、池田功は、1940年代末に盛んになる胸郭成形術をはじめとする、結核の外科的治療における結核表象について、遠藤周作『男と九官鳥』(1963)を取り上げ、「結核そのものによる死の恐怖というよりも、それを治すために行われる胸郭成形手術の方がより恐ろしいというイメージ」が「前時代の結核を描いた作品との相違であり、その表象の変容」⁵であると分析した。ただし、手術の恐ろしさのみが本作品で描かれているわけではなく、「必ず死をもたらすわけではないある種の希望とも言える明るさ」も窺えると付言している。さらに、池田は斎藤綾子『結核病棟物語』(1989)に触れて、1949年にストレプトマイシンが日本に輸入されたことで、死亡患者が激減したことから、結核が「死」と直結するような病ではないという認識が浸透し、それに伴って、結核患者の社会復帰後における苦悩が描かれるようになると指摘した。

また、木下幸太は、福永武彦『忘却の河』(1964)と『不如帰』の比較を通して、「近代では死の隠喩であり、悲恋の物語を描く要素であった〈病〉を、それ以後を生きねばならない〈出来事〉として語ることで、〈健康／病気〉の西洋医学制度の枠組みが排除してきた〈生が傷つく〉という問題を可視化させるテキストである」⁶と述べている。

1 柄谷行人「病という意味」(『定本 日本近代文学の起源』岩波書店、2004)。

2 スーザン・ソントグ『隠喩としての病』(みすず書房、1982)。

3 柄谷行人「病という意味」、前掲書、pp.139-140。

4 福田真人『結核という文化 病の比較文化史』(中公新書、2001)。

5 池田功「日本近現代文学に描かれた結核と癌の変容の考察」(『明治大学人文科学研究所紀要』、2014)、p.43。

6 木下幸太「結核、その〈出来事〉以後—福永武彦『忘却の河』を視座とした結核表象の変遷—」(『文学研究論集』、2017)、p.348。

以上のように、結核表象は、「死病」として「ロマン化」されたものから、胸郭成形手術といった外科的治療による「治療可能なもの」、そしてストレプトマイシンなどの化学療法によって「治療後の苦悩」という表象の過程をたどるわけであるのだが、本稿で、問題として焦点を当てたいのは、「死病」から「治療可能」へと移行する時期、つまり胸郭成形手術などの外科的治療を受けた患者たちの表現である。というのも、結核の外科的治療が盛んに取り組まれた1940年代から1950年前半において、日本の文学の場で結核が多く表現されたのは胸郭成形術を受けた石田波郷を始めとする「療養俳句」であった。これまでの結核表象の研究では、正岡子規などの「療養短歌」を扱うことはあっても、俳句というジャンルに関しては議論されることはなかった。「療養俳句」研究に目を向けると、波郷の詠んだ「療養俳句」に関する研究は1994年10月号の『俳句』で「石田波郷と療養俳句」という特集が組まれているなど数多く蓄積があるにもかかわらず、その他の結核療養患者の表現については、分析の対象とされることはなかった。波郷が療養生活中に執筆した『胸形変』(1949)や『借命』(1950)は「療養俳句の金字塔」とも呼ばれ、様々な結核患者に読まれ、影響を与えたことは多くの論者によって指摘されることではあるが、実際にどの患者がどのような影響を受け、どういった創作をしていったかに関しては、いまだ追究されていない。

そこで、本稿では、波郷と同時期の1947年から1952年に京都の結核療養所に入所し、1950年に肋膜外合成樹脂充填術という結核治療の外科手術を受け、療養中に波郷の句作に影響をうけながら俳句を創作した、土方鉄という人物に焦点を当てたい。土方は1927年1月、京都の被差別部落に生まれ、15歳で夜間中学に通いですが、その年(1942年)の夏に肺結核を患い入院する。以後10年間の療養生活を余儀なくされ、療養所生活中の1947年に元傷痍軍人療養所である国立京都療養所に入所し、1950年、京大結核研究所で肋膜外合成樹脂充填術を受け肋骨を9本切る。1949年に療養所内にて日本共産党に入党し、療養期間中に俳句や詩の創作活動を行うかたわら、京都文学サークル協議会など、いくつかの文学サークル運動に参加し、1952年に療養所を退所する。療養所退所後、部落解放運動に参加し、1953年から部落解放全国委員会京都府連合会で専従として活動、1956年から小説の執筆を始め、1963年『地下茎』で第三回新日本文学賞を受賞する。1974年から1990年まで「解放新聞」編集長を務め、1974年に部落解放文学賞が創設されて以来30年間、実行委員・選考委員として同賞の活動を推進し、1996年から同賞実行委員会代表となる。晩年には波郷を主人公にした小説であり、自己の療養体験と重ね合わせながら綴る記録でもある『小説 石田波郷』(2001)を執筆している。

以上の経歴のように、土方は療養所退所後に部落解放運動における文化活動面で精力的に活動してきたことで知られる。しかし、彼が結核患者として表現活動を開始させ、1954年に『土方鉄句集—よき日のために』(以降『土方鉄句集』)を上梓していることはほとんど知られていない。本作品で、土方の詠む結核は、次節で分析する外科的治療を受けた無名の結核患者の創作集、『光ほのかに 第三 眠られぬ夜のために』(1951)における、

自己の病苦を詠むという典型的な「療養俳句」と重なりつつも「療養俳句」という枠組みに収まらない「運動」や「戦争」を詠みこむといった広がりをもつことを明らかにしたい。

2 1950年代の「療養文芸」の詩歌 I ——『眠られぬ夜のために』3部作——

土方鉄について論じる前に、当時の療養文芸における詩歌の問題を整理しておきたい。アジア太平洋戦争後における結核療養者の創作を集めた代表的なものとして、四季社から刊行された『眠られぬ夜のために：療友に贈る書』（1950）『続眠られぬ夜のために』（1951）『光りほのかに —第三 眠られぬ夜のために—』（1951）がある。（以降それぞれ『眠られぬ夜のために』『続眠られぬ夜のために』『光りほのかに』と記す。）

『眠られぬ夜のために』の序文にあたる「刊行者の言葉」では、「かつてさういふ（結核罹患：注＝論者）境遇にあって、不治の病と言われた人々が、刻々として己が肉体を蝕んでゆく病巣と闘ひ、遂にいのちを勝ち得た人々の貴重な記録を集めて敢えてこの一巻を編んだ」⁷と刊行の趣旨が述べられている。その内容としては、実際に結核に罹患した人々の療養の経験や、病との向き合い方、それぞれの療養の方法などが記されている随想集である。『眠られぬ夜のために』は編者でもある高見順、長谷川如是閑、石田波郷、曾宮一念、和達清夫、藤原審爾、山本安英、芹澤光治良、日野草城などが執筆しており、俳人だけではなく結核に罹患した著名な人物たちが療養中にどのようにして過ごしたかが記されている。俳人の日野草城は結核療養に対する姿勢を次のように言う。

世に「闘病」という言葉があります。「病を養う」と平たくいうよりも、「病と闘う」という方が威勢がよく、積極的にひびき、病者を鼓舞するように聞えて、愛用されているようですが、現在のわたくしはこの闘病という言葉が好きません。病と闘うというのは、病気を敵にまわし、力瘤を入れて、相手を振じ伏せ、その息の根を止めることであります。わたくしは療養の経過をそのような戦闘的なものとは考えません。また、そのように考えることは決して療養の効果を早く得る方法だとも考えられません。昔からどの医者の中からも言われていることですが、療養の真諦は心身の安静にあります。⁸

「闘病」という言葉に付随した病者への鼓舞や積極性を否定する日野の指摘からは、結核という病に対して、「心身の安静」に努めることによって折り合いを付けながら付き合っていく必要性が示されている。

第1部に続く『続眠られぬ夜のために』の序文では「さきに十七氏の執筆による随想集『眠られぬ夜のために』を刊行するや、これを味読する人々の絶大なる支援と好評を得

⁷ 高見順編『眠られぬ夜のために：療友に贈る書』（四季社、1950）、pp.1-2.

⁸ 高見順編、前掲書、pp.216-217.

て、またたく間に数版を重ね、剩へ、その続篇を需める声やまことに頻りであった」⁹と記され、多くの結核患者たちの反響を得たことがわかる。第2部の特徴としても、三好達治、秩父宮雍仁、岸田國士、吉野秀雄、朝香千賀子、山口誓子といった著名な執筆者による療養体験が語られていることが挙げられる。

このように、著名な療養者による随想集という体裁で編集されていた『眠られぬ夜のために』『続眠られぬ夜のために』は、第3部の『光ほのかに』になると、その編集方針が変化する。『光ほのかに』の「あとがき」では、読者から寄せられる手紙に「前二著のような知名の文化人でない、名もない普通の療養者の、真実の声を伝える第三集の刊行を期待」していたものが多かったことに注目し、この企画を取り上げた旨が語られている。この編集意図の変更により、『光ほのかに』の構成は第1部：散文、第2部：短歌、第3部：俳句、第4部：詩という4部構成となっており、それぞれ、亀井勝一郎、佐野孝、吉野秀雄、石田波郷、三好達治が選者となって、応募されてきた無名の結核患者の作品を選定している。

第三部の俳句において、選句にあたった波郷は選評で「集まった110篇(1、100句)の句稿から、31人の作111句を選出した」¹⁰とされ、入選者は小川一灯、立木青葉郎、菊池日呂志、肥田埜勝美、山田文男、岸田稚魚の6人、選外佳作として古賀まり子など25人の俳句が採録されている。1100句という膨大な句が寄せられた中から選ばれた、入選者の顔ぶれを見ると、そのほとんどが選者である波郷と密接な関わりがあることがまず目を引く。6名とも波郷が入所していた清瀬の国立東京療養所に入所しており、小川、菊池、山田の3名は波郷も所属していた『馬酔木』の同人、残る3名は波郷が1953年に復刊させる『鶴』の同人であるなど、非常に近い関係性であったことがわかる。また、入選者は執筆者紹介の欄が巻末に付されており、小川以外の5人はみな胸郭成形術、あるいは合成樹脂球充填術を受けていることが分かる。しかし、『光ほのかに』において入選者6人はそれぞれ8-10句ずつ選ばれているにもかかわらず、外科的治療を受けたことに関して詠まないものが多い。

病める手に胡桃は割れず梅雨に入る	小川一灯
更衣空罐拾ひを遠見つゝ	立木青葉郎
若き日のおほかたを臥す夜の木の芽	菊池日呂志
癒ゆるなし軍病院の落花以後	肥田埜勝美
衾引けば独語の息の顔蔽ふ	岸田稚魚

小川の病によって力の入らない手では胡桃すらも割れない状態や菊池の青年期を絶対安静で過ごさねばならない寂しさ、あるいは立木のように病衣を衣替えする季節になっても、病室から空き缶拾いを見るしかない状態、といったように自身の病状について、

⁹ 三好達治編『続眠られぬ夜のために』(四季社, 1951), p.1.

¹⁰ 松本國雄編『光ほのかに 第三 眠られぬ夜のために』(四季社, 1951), p.241.

詠むものが多くを占める。その一方で、山田文男の句では

肋骨の切口疼くころもがへ
ハンケチも古りけり遺残空洞も
芭蕉忌にあたりて失せし肋かな
秋の暮隣は肺をとられにき

などのように、直接的に外科的治療を表現されている。それぞれの句で「肋骨の切口」「空洞」「肋」「肺をとられ」といった手術による身体の状態が詠まれることで、術後の病苦が読み取ることができる。このような特徴は残る選外佳作61句に関しても同様で、

鶏頭の真紅に触るゝ手術以後	古谷艶子
背の傷が痒くて春の月夜らし	古谷艶子
手術決る窓いつばいに虹懸けて	歌田新子
気胸腔夜雷に应ずことありや	波頭勉男

といった4句が「手術」や「傷」といった語句が用いられており、入選句と合わせ鑑みて、(歌田の句を除いて)外科手術以前の療養を詠むよりも、外科手術以後の病状を句にすることが特徴として挙げられる。ここからは、池田が指摘した「外科手術に対する恐怖心」は読み取ることとはできない。こういった結核療養者の句作に関して、波郷は選評で「現在の療養俳人の多くは、病苦や病愁を詠いがちだ。そういうものから救はれる為には、それを避けるよりも、それを十七字に詠いあげる方がよい」と批評し、「命を惜しむ心や肉身への切情は、万人の胸を打つものである。療養俳句は今日では、多少そういう事情にもたれているようでもある」¹¹と「療養俳句」のマンネリを指摘している。

以上のように、『光ほのかに』において詠まれる俳句は、外科的治療を受けていたとしても、術後の経過や、それまでの「療養俳句」で詠まれてきた自己の病苦を詠むものがほとんど占めることがわかる。

3 1950年代の「療養文芸」の詩歌Ⅱ

——『風に鳴る樹々・全国結核療養者詩集』——

次に『光ほのかに』が刊行された3年後の1954年に野間宏、安東次男、瀬木慎一によって編纂された『風に鳴る樹々 全国結核療養者詩集』(以下『風に鳴る樹々』)がある。この詩集は有蘭が「当局からのサークル活動への圧力とレッド・ページを乗り越えて刊行された」¹²

¹¹ 松本國雄編、前掲書、p.242.

¹² 有蘭真代「生存権、コミュニケーション、そして詩——1950年代の療養所サークル——」(宇野田尚哉・川口隆行・坂

と述べるように、編者らの強い意識が行動に現れて刊行されたものであるのだが、その反面、刊行直後の国分一太郎の書評では次のような問題点が指摘されている。

百ぺん近くのうち、わたくしには、療友や社会に呼びかけたものよりは、自然や肉親によびかけたものの方に、よいものが多いように感じられた。(略)これは、生活と詩の間に何らかのカンゲキがあるのではないかと考えさせられた。(略)発病の原因をふりかえつてかいた詩が一ぺんもないのに、なおすことに不熱心な社会を衝く詩はたくさんある。社会のために、かくかくの働きをして発病したのに、その社会がおれたちを見ずけている——という思考の脈絡をたどる詩が見当たらない¹³。

「生活と詩の間」の「カンゲキ」とは「社会を衝く詩」ばかりが詠まれていることによって、療養者たちの病に対する向き合い方や苦しみが見えていないことを指していると言える。この問題は坪井秀人の次の指摘によっても示されている。

個々の詩についてよりもここで問題にすべきなのは、編集のあり方であって、療養政策の不備に対する批判が療養者にあるとしても、いわゆる〈療養文芸〉を政治的に組織化しようとする力学がその編集に働いていることを指摘しなければならない。(略)ここには病気を個人の所有／負債と捉える通念を転倒させて、病気を社会的に共有される記号と捉え、闘病とは身体における闘いではなく、身体による(社会との)闘いへと転移される。闘病詩が一種の戦争詩へと編み直されるのだ¹⁴。

ここでの、「〈療養文芸〉を政治的に組織化しようとする力学」は詩集が刊行される前年の1953年、『新日本文学』10月号において「闘病者の文学」という特集における文章に見ることができる。その特集の各記事における共通点として、荒井裕樹は①「病気を社会的な構築物として捉えている点」②「『科学』への信仰とそれに基づく社会変革の必要性を説いている点」③「文学は病苦を個人の内に閉塞させるのではなく広く社会へと開き、病者の立場から民主的な世界への道筋を示す役割を負うべきであるという主張」の3点を示している¹⁵。また、詩集の編纂者である瀬木慎一の「明日へ生きるもの」という文章から、「『療養文芸』には、諦観の美学や病苦の感傷性を否定し」、「民主的な世界を切り開くための貢献」が必要とされていたとし、「不治という暗黒から治癒という光明へと転生して見せた療養患者たちは、民主主義を彩る価値転換のパトスを、文字通り身体をもって演じて見せる存在として期待された」¹⁶とまとめている。

口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待——』影書房、2016)、p.246。

¹³ 国分一太郎「風に鳴る樹々」(『列島』9号、1954.7)、p.34。

¹⁴ 坪井秀人『戦争の記憶をさかのぼる』(筑摩書房、2005)、pp.182-183。

¹⁵ 荒井裕樹「『療養文芸』への試論——サークル文学運動への一視点として——」(『日本近代文学』(81)、2009)、p.163。

¹⁶ 荒井裕樹、前掲論文、p.163。また、鳥羽耕史「サークル誌ネットワークの可能性——『人民文学』と『新日本文学』」(『新日本文学』(81)、2009)、p.163。

以上のように、『風に鳴る樹々』において結核療養患者たちの表現活動が「身体による（社会との）闘い」として受容されていくことは、『風に鳴る樹々』の構成が「誰も動くな——平和を守ろう」という章のまとまりで締めくくられることから読み取ることができる。具体的な作品に関して言えば、先に述べた瀬木の論考において、ほんだ・たつんど「所長は——／将軍です。／看護婦は——／あおざめた兵士たちです。／絶対権力のもと／また口もとの幼いひとりの娘が／今日も倒れてゆきました。」¹⁷という詩を取り上げて、「特に詩人は、戦争中と同じ受難を体験することになった」¹⁸と語るように、病との闘いを戦争へと向けさせようとする意図がにじみ出ていると言えるだろう。

4 療養と運動の体験を表現にして

『眠られぬ夜のために』『続眠られぬ夜のために』においては、著名な執筆者たちの療養の方法や結核という病と闘うのではなく、安静に努める態度の必要性が説かれ、さらに『光ほのかに』では、病苦や病愁ばかりが詠まれるありきたりなものではあるものの、無名の療養者たちによる表現が世に送り出された。これらに対して『風に鳴る樹々』では、編集者による結核療養者の政治的な組織化のために編まれたことにより、病と闘うこと、ひいては社会と闘うことに関する表現が多くを占めることを確認した。これらの結核療養者たちの表現を踏まえつつ、こうした時代背景から登場してきた土方鉄の句作を確認したい。

『土方鉄句集』は1954年11月1日に方向俳句会に編まれ、京都文学サークル協議会により発行された。B5版のガリ刷りで書かれた『句集』は土方本人のあとがきによると1947年から1953年中に書きためた作品の中から選んだことがわかっている。本作品については拙稿¹⁹において、波郷の「療養俳句」からの影響など、すでに論じているものと一部重複するが、本節では『光ほのかに』において見られた結核患者たちの自己の病苦を詠むという表現との差異を明らかにするために、「療養俳句」だけではない療養所退所後の体験を踏まえた句も取り上げ、より多角的な視点から整理していく。

『句集』の構成は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3章仕立てで、Ⅰ：45句、Ⅱ：27句、Ⅲ：46句の計118句となっている。また、後述するように、句の形式の転換や、読まれる内容の変化から『土方鉄句集』における句配は時系列に並んでいる。句の形式の観点から見ると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲそれぞれにおいて次のような転換が見られる。

学』から見る戦後ガリ版文化——」（『昭和文学研究』(52), 2006, p.29)では、広島国立療養所・高原詩の会におけるサークル誌『高原』について、取り上げており、「結核療養文学を社会的・大衆的に再編成する動きは、この時期、広く受け入れられていた」と述べられている。

17 瀬木慎一「明日へ生きるもの——闘病者の文芸作品——」（『新日本文学』8(10), 1953.10), p.97.

18 野間宏、安東次男、瀬木慎一編『風に鳴る樹々 全国結核療養者詩集』（朝日書房、1954）, p.47, 題は「眠られぬ夜の歌」。

19 後藤田和「サークル文化運動と部落民の表現——土方鉄を中心に——」（『論叢国語教育学』14号, 2018.7）。

(Ⅰ) 枯木道死人を撮ぶ吾れも病めり

(Ⅲ) 横たわる

せまく

(Ⅱ) 秋風 肺の奥でもひびいている

つめたい手術台

I では文語定型句、II では口語自由律俳句、III では多行俳句というように非常に実験的な創作がなされている。ここからは、時間や空間の切れを視覚的に明示した富澤赤黄男の「字間空け」や、それら視覚詩の要素をより際立たせた高柳重信による「多行俳句」の影響を強く受けていることがわかる。このような表現方法の変化について、土方自身、後年次のように語っている。

当時、すでに波郷の『胸形変』と『借命』の2句集は、刊行されていた。わたしは療養所で、患者仲間から、俳句の手ほどきをうけた。最初から保守的な写生俳句は学ばなかった。なにしろいろんな人が、多様な俳句グループにはいていたからだ。山口誓子をはじめ『天狼』の人びとの作品をほめる人がおれば、高柳重信や富澤赤黄男の前衛的な俳句を、もちあげる人びともいるという具合。その双方から影響を受けながら、自分の俳句を創ろうと、企てる人もいた。(略)いずれにしても、療養所で療養俳人にもまれたこと、『借命』のもつ波郷の眼光によってわたしの俳句の基礎は、つくられたといっている²⁰。

そして、波郷からの影響を受けたものとして、次のような句の相似が見られる。

① 土方：鴉が鳴くたびに頭が空になる (Ⅰ)

波郷：たばしるや鴉叫喚す胸形変(『借命』)²¹

② 土方：初蝶や病衣脱がざること久し (Ⅰ)

波郷：初蝶や吾が三十の袖袂(『風切』)²²

①の比較では「鴉」という季語、そして鴉が「鳴く」というモチーフが共通し、②の比較では「初蝶や」という上五が共通していることなどから、その影響力の大きさが計り知られる。こういった波郷との共通点は、語やモチーフだけに止まらず、俳人の長谷川權が「超絶形式」と呼んだ技法すなわち「まず上五をがっしりと据え、続く中七・下五は一気呵成に詠み下す」²³という特徴にも見出すことができる。

²⁰ 土方鉄『小説 石田波郷』(解放出版社、2001)、p.286。

²¹ 石田波郷『借命』(作品社、1950)。なお、引用は石田波郷『石田波郷全集』第二巻 俳句II (富士見書房、1987)、p.69より。

²² 石田波郷『風切』(一条書房、1946)。なお、引用は石田波郷『石田波郷全集 第一巻 俳句I』(富士見書房、1987)、p.98より。

²³ 長谷川權「夜の風鈴——石田波郷論——」(『俳句』43(10)、1994.10)、pp.98-99。

初蝶や病衣脱がざること久し (I)
 雪晴れや死者の病衣が干されたり (I)
 運ばれゆく屍の洗いざらしの足袋 (I)
 手術前石炭こぼしつ投げ込む (I)

「初蝶や」、「雪晴れや」の句については、上五の切れ字に「や」が用いられていること、中七と下五のつながりが、「初蝶や」の句では句またがり、「雪晴れや」の句では主述の関係として詠まれていることが共通性として指摘できる。こういった「超絶形式」はIでのみ用いられている技法であることから、土方にとっての俳句創作の基盤として波郷の「療養俳句」があったと読み解くことができる。

次に、俳句に詠まれる結核に関して目を移すと、『光ほのかに』において見られた「療養俳句」のマンネリが、『土方鉄句集』においても読み取ることができる。

(I) 秋の蠅吾が喀き溜めし血を舐むる
 (II) 喀けど喀けど俺の五体に血は脈うつ
 (II) だれもどこも寐てしまって一人血を喀く
 (II) 血を喀いた肺がぶつぶついうよ青空
 (II) 髭ばかり伸びる喀血まだとまらぬ
 (III) 白い胸帯 (III) 横たわる (III) あばら骨
 ぐるぐる せまく きられても
 骨なき胸となる つめたい手術台 きられても
 生きていたいよ

(I)(II)の句では結核による喀血という自身の病苦が生々しく詠まれ、(III)では外科的治療を受けたことで切除された「骨」や手術直前の状態、そして術後の痛みなどが詠まれる。特に(III)における表現は『光ほのかに』の句には見られない緊迫感が「せまく」「つめたい」といった語から視覚的に描かれ、手術における死の恐怖心よりも「生きていたい」という生への執着心が詠まれているが、これも波郷が指摘するように「万人の胸を打つ」ようなありきたりな表現に収まっている。

しかし、こういった「療養俳句」だけではない句作も収められていることに『土方鉄句集』の特異性があることを先に述べた。次のような句である。

(II) メガホンべとべとに降られ「平和守ろう」
 (II) 喀いても血 友らピラをはってるか
 (III) 青い草 (III) 投げかえせ!
 ふみにじる 石を
 異国のでかい靴 ああ 俺の胸がはぜそうだ

〈五二年メーデー〉

これら『『平和守ろう』や「ピラ」、「異国のでかい靴」などの表現からは、土方が療養所を退所した1952年以後の経験した、反戦平和運動の影響を色濃く投影したものである。特に「喀いても血」の句は『風に鳴る樹々』に収められた詩作とも重なるような病と闘う姿勢が見られ、当時の共産党をアジテートする内容のものが散見される。

しかし、「療養俳句」や反戦平和運動、共産党運動の経験という文脈で読み解くことのできない句が本作品には表現されている。それは「爆音」という言葉から連想される1950年代前半の東アジアの情勢についてである。「爆音」という一つの単語から読み取り得る本作品の想像力の広がりや次節で具体的に見ていく。

5 療養所から東アジアへ

まず、具体的な句を挙げる。

① 爆音――
手術台に
よこたわる	② 昼も暗い路地
爆音の
反響	③ 爆音へ
むけて眠むるも
骨なき胸
④ 爆音
ぎしぎしと鳴る
木のベッド	⑤ 爆音
汗拭いて
寐ていねばならぬか（すべてⅢより）	

「爆音」という語がすべての句において用いられており、こういった共通語句の句作は、『土方鉄句集』の中で「血」や「喀く」以外には見られない。①、③、④、⑤については、「手術台」、「骨なき胸」、「木のベッド」、「汗拭いて」という表現から、結核の外科的治療に関わることであろうことはすぐさま了解できる。しかし、②は単独で見ると「療養俳句」と読み取ることは難しいだろう。

ここで、同時代の俳句において「爆音」という語句が用いられた例として、現代俳句協会創立に参画し、後に現代俳句協会副会長に就いた中島斌雄の次の句について見てみよう。

爆音や乾きて剛き麦の禾

この句は中島が主宰した「麦」誌の1954年8月号に発表されており、俳人の酒井弘司に次のように評されている。

基地化された国土への耐えがたい怒りの情を感得することができる。黄麦の大地の上空を通過する爆音への痛みと怒りは、天を刺すように靱く直立した麦の禾の形

姿に、自らの思いをせいっぱいこめて書かれている²⁴。

このことから、「爆音」という語は基地化された日本から飛ぶ米軍の爆撃機の音であろうことが推測される。こういった俳句に社会的な事象を詠みこむ態度は1950年代の俳壇に「社会性俳句」として登場する。「社会性俳句」については様々な議論がなされているが、ここでは、俳人の筑紫磐井による論²⁵に沿って整理していく。

社会性俳句の原点を1953年11月の『俳句』における特集『『俳句と社会性』の吟味』にあると指摘する筑紫は、その特集で取り上げられた評論が例示した作家や句が圧倒的に中村草田男と加藤楸邨の句であることから、そこでの「社会性俳句」は草田男と楸邨の俳句がモデルになっていると言う。また、草田男と楸邨以外にも岸田稚魚が人間探求派の俳句誌「寒雷」の1953年2月号において「演習水域」と題して次の句を詠んだことに注目している。

ここ千葉県沿岸演習水域にて艦砲実弾射撃連日なり
艦砲音ちんぽこ並べ水浴び子ら
実弾射撃ゆさぶる穴に蟹入る
潮浴びの甲羅につづと艦砲音
実弾射撃に馴れたる蟹の日浴びる

この句について筑紫は「『演習水域』とは九十九里町(当時の豊海町)の漁場が高射砲射撃演習地になった」²⁶と補足し、それらが好評で続編が発表されたことなどから岸田が社会性俳句の創始者であると指摘した。そして、岸田の後続の「社会性俳句」の作品として

ジェット機の烙印ふかし枯畑に	中野弘一(「基地半蔵」『寒雷』1954年4月号)
遠試射音左千夫の生家青柚照り	行木翠葉子(「試射音」『鶴』1955年11月号)
基地大高根射撃場強制測量	
ピケかたく守れ唐辛子くれなゐに	栗田九宵子(「魂棚」『鶴』1955年11月号)
山の下基地附近	
接収拒否のピラ一片の冬電柱	草間時彦(「新潟行」『鶴』1956年3月号)

といった作品を挙げ、「これらを見ることにより、社会性俳句の典型、或いはいかに社会性俳句が発生したかも分かってくると思われる。それは、社会性俳句は先ず『基地俳句』から始まったのではないかということである。」「²⁷と提起した。

²⁴ 酒井弘司「初学時代に出会った句」(『俳句』37(6), 1988.6), p.234.

²⁵ 筑紫磐井「現代俳句の道筋——社会性俳句を軸として——」(『現代俳句』642, 2019.12).

²⁶ 筑紫磐井, 前掲論文, p.21.

²⁷ 筑紫磐井, 前掲論文, p.23.

以上が、筑紫による「社会性俳句」に関する議論であるのだが、前述した中島の詠んだ「爆音や」の句に関しても、筑紫が言うように「基地俳句」としての性質を帯びることが指摘できるだろう。しかし、土方の詠じた「爆音」を用いた句においては(②を除いて)基地を詠みこむのは無理があると考えられる。

では、「爆音」という語句は何を表すのか。「音」という感覚との結びつきを考えた場合、一つ連想されるのは、結核の外科的治療において、肋骨を切除するときなどの手術音である。局所麻酔による手術が一般的であった当時、意識がある中で肋骨の切除が行われていた。そういった環境下での手術について土方は次のように語っている。

ごわごわする布を掛けられ、脚を手術台ごとくぐられ執刀を待っていた。メスが走ったのが、感じられた。なにしろ局部麻酔である。わたしは、緊張していた。切開部が口を開いているのが、感じられる。(略)とくに、肋骨を切断するのが痛い。肋骨は、胸骨側と背骨側の2か所切って取り出すのではなく、これは想像だが、10センチぐらいずつ、わけて切ったようだ。医師は、器具で肋骨を挟んで、うんうん唸りながら切断する。だが医師の腕力がたりないのか、すぐさまバキッとはいかない。唸りながら力をこめると、わたしも激痛に唸るしかないのだ²⁸。

手術の際に、「爆音」が鳴り響くことはないのだが、意識がある状態で、切られているのは見えず、音のみが聞こえてくる。ギリギリと切られていく自身の肋骨やそれに伴う恐怖、そして激痛といった手術中のさまざまな「音」が連想として「爆音」へと広がっていったと読むことができるのである。

また、土方は結核に罹患してすぐは、京都の自宅で療養をしており、当時のことを振り返って次のように述べている。

咯血の夜、警戒警報が空襲警報にかわった。わたしは、観念して蚊帳のなかで寝ているしかなかった。都市がつぎつぎと、焼夷弾で焼かれていた。つぎはうちの街と、京都市民は、おそれおののいていた。B29の重い爆音がしてきた。血を吐いて死ぬか、空襲の爆弾で死ぬか。わたしは、明かりを消した闇の中で、爆音を聞いているほかなかった。息のつまるような時間だった²⁹。

ここからは、アジア・太平洋戦争中における米軍爆撃機の音が「爆音」として捉えられていることが分かる。自宅療養中に身動きも取れずに、ただただ聞くしかなかった「爆音」を療養所内で受ける外科的治療と重ねて詠むことで、死ぬかもしれないという恐怖を体験するような主体が浮かび上がってくる。

ここまで、「爆音」の句にアジア・太平洋戦争の経験と療養体験の重層性を読み取って

²⁸ 土方鉄、前掲書、pp.279-288.

²⁹ 土方鉄『小説 石田波郷』(解放出版社、2001)、pp.270-271.

きたが、さらにもう一つ、「爆音」から連想されるイメージを追尋したい。そこで重要になるのが、③の句および、「爆音」を使った土方の俳句が作句された時期である。土方の本名は(当時)藤川正美というのだが、「ふじかわまさみ」という名で1951年5月10日の『解放新聞』に次の俳句が掲載されている。

爆音
ネジクギのように
食いこんでくる恐怖

また、同紙の1952年1月10日にも

爆音	爆音
ぎしぎしと鳴る	ひそかに握る
木のベッド爆音	二つの掌

という「爆音」を用いた句が掲載されている。このことから、「爆音」の句が作句されたのは1951年から1952年にかけてであり、これは朝鮮戦争期に相当する。そこで表現される「爆音」といえば真っ先に米軍の戦闘機が朝鮮半島へと向かうその音であると言える。このことは、昨今盛んに議論されている1950年代サークル文化運動研究においてもすでに述べられていることで、川口隆行は広島ของサークル詩誌『われらの詩』第8号に掲載された林幸子の「黒いひまわり」の末部における「爆音がかぶさる」の「爆音」を「朝鮮半島に向かう米軍飛行機のそれ」と指摘している³⁰。また、東京南部でサークル文化運動を展開した「下丸子文化集団」を牽引した、江島寛の「五人を工場へ」という詩においても、「爆音におびえ／監視の目におびえる／息苦しい工場にではならぬ³¹」と詠まれており、「爆音」は朝鮮戦争下において米軍爆撃機の音ということが言を俟たない状況であったと言える。

そうすると、土方が詠んだ「爆音」の句には、さらに「朝鮮戦争」というイメージが重なり合うこととなる。アジア・太平洋戦争下のB29の音、結核治療の手術中における音、朝鮮戦争下のB29の音、これら3種類のイメージが「爆音」という語につながり合わされることで、「療養俳句」や「社会性俳句」という枠組みでは議論しきれない問題がここに立ち現れてくるのである。この点にこそ、『土方鉄句集』における重要な特異性の一つを指摘できる。もちろん、先に引用した坪井の批判、つまり社会と闘う結核療養者の表現として読み得るということも考慮する必要があるが、当時の「療養俳句」や「社会性俳句」が生み出した典型的な俳句創作の枠組みを解体し、「療養所」という場から東アジアへと問題を押し広げる表現の可能性として、土方鉄の「爆音」俳句を読み取ることができるのではな

³⁰ 川口隆行『『われらの詩』と朝鮮戦争』（『大阪大学日本学報』、第33号、2014）、p.116.

³¹ 井之川巨編『鋼鉄の火花は散らない——江島寛・高島青鐘の詩と思想』（社会評論社、1975）、pp.14-15.

いだろうか。

6 おわりに

本稿では、外科的治療における結核表象について、これまで議論されることのなかった俳句における表現として、土方鉄という作家の俳句創作から考察した。そこでは、結核療養所という空間で石田波郷をはじめとする俳人の表現を自己の創作へと取り込むことによって、表現を模索する一人の患者像が浮かび上がってくると同時に、療養という主題のみを表現しようとせず、個人的な体験から社会的な広がりを持った俳句が詠まれていることを確認した。そして、『光ほのかに』において見られたような結核に関する病苦や病愁、『風に鳴る樹々』における社会と闘う結核療養者の態度と重なりつつも、それだけでは捉えきれない「爆音」という語句が表現されていたことを明らかにした。

アジア・太平洋戦争、結核療養、朝鮮戦争という3つの層をもつ想像力の広がりや「療養俳句」や「社会性俳句」という枠組みでは捉えきれない側面を持つという点において『土方鉄句集』の特異性は重要な意義を持つと言える。

前述した「社会性俳句」について筑紫磐井は次のようにも述べている。

実は、「社会性俳句」というものが、分かったようで分かっていないこともある。そもそも「社会性俳句史」というものを誰も見たことがないのだ。もちろん、赤城さかえの名著『社会性俳句論争史』でさまざまな論争は知っているように思うのだが、よくよく考えてみるとそれは、「社会性俳句論争史」であって、「社会性俳句史」ではない。いつ社会性俳句が生まれ、それはどんなものであったかはこの論争史だけではよく分からない。社会性俳句が所与にあって、それで論争が進んでいると考えられているからだ³²。

つまり、これまで論じられてきた既存の枠組みを「所与」のものとして議論することにより、問題の本質が見落とされることになってしまう、という事態が「療養俳句」という場においても起こっていたと言えるのである。土方が提出した表現からは、これまでの結核の外科的治療をめぐる、結核に対する恐怖を詠うことや病苦、病愁を詠うこと、社会と闘う療養者という「所与」の枠組みをずらしながら、朝鮮戦争下における東アジアの情勢という新たな問題へと想像力を拡げていく可能性があることを、改めて強調しておきたい。

³² 筑紫磐井、前掲論文、p.19.

参考文献(Bibliography)

- 荒井裕樹(2009)『『療養文芸』への試論——サークル文学運動への一視点として——』『日本近代文学』, (81), p.163. Arai, Yuki(2009)“Ryoyobungei” heno shiron : sakuru bungakuundo heno ichishiten toshite, *Nihonkindaibungaku* Vol.81, p.163.
- 池田功(2014)「日本近現代文学に描かれた結核と癌の変容の考察」『明治大学人文科学研究所紀要』第74号, p.43. Ikeda, Isao(2014) *Nihon kindendai bungaku ni egakareta kekkaku to gan no henyō no kosatsu. Memoirs of the Institute of Cultural Sciences, Meiji University* Vol.74, p.43.
- 石田波郷(1987)『石田波郷全集・第一巻・俳句Ⅰ』, 東京: 富士見書房. Ishida, Hakyō(1987) *Ishida hakyō zensyū daiikkan haiku I*, Tokyo: Fujimisyuppan.
- 石田波郷(1987)『石田波郷全集・第二巻・俳句Ⅱ』, 東京: 富士見書房. Ishida, Hakyō(1987) *Ishida hakyō zensyū daiinikan haiku II*, Tokyo: Fujimisyuppan.
- 井之川巨編(1975)『鋼鉄の火花は散らない——江島寛・高島青鐘の詩と思想』, 東京: 社会評論社. Inokawa, Kyo(1975) *Kotetsu no hibana ha tiranai : Ejima, Hiroshi, Takashima, Seishō no shi to shiso*, Tokyo: syakaihyoronsya.
- 柄谷行人(2004)『病という意味』『定本・日本近代文学の起源』, 東京: 岩波書店. Karatani, Koji(2004) *Yamai toiu imi : Teihon nihonkindaibungaku no kigen*, Tokyo: Iwanamishoten.
- 川口隆行(2014)『『われらの詩』と朝鮮戦争』『大阪大学日本学報』(33), p.116. Kawaguchi, Takayuki(2014) “*Warera no uta*” to tyosensensō, *The Journal of Japanese Studies, Osaka University* Vol.33, p.116.
- 木下幸太(2017)『結核、その(出来事)以後——福永武彦『忘却の河』を視座とした結核表象の変遷——』『文学研究論集』第46号, p.348. Kinoshita, Kota(2017) *Kekkaku, sono (dekigoto) igo : Fukunaga, Takehiko Bōkyaku no kawawo shiza toshita kekkaku hyōsō no henshō*, *Studies in arts & letters : literature, history, geography* Vol.46, p.348.
- 酒井弘司(1988)『初学時代に会った句』『俳句』37(6), p.234. Sakai, Hiroshi(1988) *Syogakujidai ni deatta ku, Haiku* Vol.37, No.6, p.234.
- 瀬木慎一(1953)『明日へ生けるもの——闘病者の文芸作品——』『新日本文学』8(10), p.97. Segi, Shinichi(1953) *Asu he ikurumono : tobyōsya no bungei sakuhin*, *Shin nihon bungaku* Vol.8, p.97.
- 高見順編(1950)『眠られぬ夜のために: 療友に贈る書』, 東京: 四季社. Takami, Jun(1950) *Nemurarenu yoru no tameni : nyōyū ni okuru sho*, Tokyo: shikisya.
- 筑紫磐井(2019)『現代俳句の道筋——社会性俳句を軸として』『現代俳句』(642), pp.19-23. Tikushi, Iwai(2019) *Gendaihaiku no michisuji: syakaisei haiku wo jiku tosite*, *Gendaihaiku* Vol.642, pp.19-23.
- 坪井秀人(2005)『戦争の記憶をさかのぼる』, 東京: 筑摩書房. Tsuboi, Hideto(2005) *Senso no kioku wo sakanoboru*, Tokyo: Tikumasyōbo.
- 鳥羽耕史(2006)『サークル誌ネットワークの可能性——『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガリ版文化』『昭和文学研究』(52), p.29. Toba, Koji(2006) *Sakuru shi netwaku no kanosei : Jinmin bungaku to Shin nihon bungaku kara miru sengo garibanbunka, Syowabungakukenkū* Vol.52, p.29.
- 野間宏, 安東次男, 瀬木慎一編(1954)『風に鳴る樹々 全国結核療養者詩集』, 東京: 朝日書房. Noma, Hiroshi, Ando, Tsuguo, Segi, Shinichi(1954) *Kazeninarukigi zenkokukekkakuryōyōsyasishū*, Tokyo: Asahishōbo.
- 長谷川權(1994)『夜の風鈴——石田波郷論』『俳句』43(10), pp.98-99. Hasegawa, Kai(1994) *Yoru no furin : Ishida, Hakyō ron, Haiku* Vol.46, pp.98-99.
- 土方鉄(2001)『小説 石田波郷』, 大阪: 解放出版社. Hijikata, Tetsu(2001) *Syosetu ishida hakyō*, Osaka: Kaihoshinbunsha.
- 土方鉄(1971)『病める思い出から』『展望』(152), Hijikata, Tetsu(1971) *Yameru omoide kara, Tenbo* Vol.152.
- 福田眞人(2001)『結核という文化 病の比較文化史』, 東京: 中央公論新社. Fukuda, Mahito(2001) *Kekkaku toiu bunka*, Tokyo: tyuokoronshinsya.

方向俳句会編(1954)『土方鉄句集 よき日のために』, 京都: 京都文学サークル協議会. *Hokohaikukaihen*(1954)
The collection of Tetsu Hijikata haiku: For a good day which depicts the treatment of tuberculosis in
haiku.

松本國雄編(1951)『光ほのかに 第三 眠られぬ夜のために』, 東京: 四季社. Matsumoto, Kunio(1951) *Hikari*
honokani daisan nemurarenu yoru no tameni, Tokyo: Shikisya.

三好達治編(1951)『続眠られぬ夜のために』, 東京: 四季社. Miyoshi, Tatsuji hen(1951) *Zoku nemurarenu yoru*
no tameni, Tokyo: Shikisya.

「文化」(『解放新聞』), 1951.5.10. *Bunka Kaiho Shinbun*, 1951.5.10.

「文化」(『解放新聞』), 1952.1.10. *Bunka Kaiho Shinbun*, 1952.5.10.